

2015年3月15日 主日礼拝

説教「最後の晩餐」

マタイの福音書 26章 26-29節

【レントの驚き】

レントは、主イエスのご受難を思うとき。毎年めぐってくるのですが、私たちから驚きがなくなることはありません。なぜなら神が人となって、十字架に架かってくださったことを思うときだからです。あり得ない愛、あり得ない犠牲、あり得ないことを神さまはしてくださったのです。私たちのために。

【聖餐の制定】

今日の聖書の個所では、聖餐が制定されています。聖餐とは、神である主がご自分を与えてくださった行為を記念する。記念するだけでなく、再現する。再現して、体験することです。「これは、わたしのからだ」「これは、わたしの血」という不思議なことばは、聖餐を通して、主イエスが私たちにふれてくださり、ご自分と私たちの結びつきを固くしてくださることを意味するのです。

だから、私たちは、主イエスにつながっていればよいのです。そうするなら、光の中に生きることができ、闇に呑み込まれることはありません。死に呑み込まれることもないのです。

【散り散りに】

最後の晩餐には、すでに十字架の暗い影がさしています。そしてこの晩餐の後、彼らをと

まく闇はますます深くなっていくように見えます。最初の聖餐にあずかった弟子たち、すばらしい主イエスの愛に触れた弟子たちに主イエスはおっしゃいました。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまづきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる』と書いてあるからです」(31)。

けれども、神さまは「しかし」の神。主イエスは「しかし」の主。「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます」(32)と主はおっしゃいました。ここにも「しかし」があります。あなたがたは、みな暗やみの力に支配されてしまうだろう。主イエスご自身もまた、死という闇の力に呑み込まれてしまうように見えるだろう。「しかし」どんなに闇が深くても、恐れることはない。そうおっしゃったのです。

弟子たちを愛し、弟子たちのためにいのちを捨ててくださった主イエス。その主イエスが、いつまでも弟子たちと離ればなれのままで、おられるはずはないのです。愛そのものである主イエスが、愛することができない死の中にいつまでも閉じ込められておられるはずがないのです。だから、おっしゃいました。「しかし」私は先にガリラヤで待っている。そこで、私と会い、もう一度やり直すことができる、と。

【ダ・ビンチ】

最後の晩餐で有名なのは、レオナルド・ダ・

ビンチの絵です。あの絵で主イエスからは、全員の顔が見えません。でも実際は、ユダヤの食事は車座。主イエスは全員の顔をご覧になることができました。主イエスは愛のまなごしを弟子たちに注いでくださっていました。やがて主イエスを見捨てて逃げる弟子たちに、主イエスは、燃えるような愛のまなごしを注いでおられたのです。このあとの、十字架、そして復活というできごとを通して、この愛のまなごしは変わることがありませんでした。このまなごしは、私たちにも注がれています。私たちが臆病なときも、罪の暗やみの中にいるときにも、主イエスは私たちを、愛のまなごしでみてくださっています。このまなごしが、私たちの上にある限り、私たちは絶望しなくてもよいのです。何度でも、何度でも立ちあがることのできるのです。

【人となられた主イエス】

主イエスは、私たちと同じほんとうの人になってくださいました。私たちの経験する悲しみや苦しきは、主イエスが先に、すべて経験してくださっています。私たちが経験することで、主イエスの経験なさっていないことは、何もありません。主は、私たちと同じ条件で、生きて、死んで、よみがえってくださいました。その中で父とひとつであり続けることによって、神と人とを愛し抜く生き方と死に方をしてくださり、私たちが後をたどることができる道を切り開いてくださったのです。